

## スペインにおけるグラミン銀行型マイクロファイナンスが最貧困層に果たす役割

国際協力学専攻 47-156808 尾上悠

指導教員 堀田昌英 教授

キーワード:グラミン銀行, マイクロファイナンス, スペイン, 最貧困層

### 1. 研究の背景

スペインでは、ほぼ全ての金融機関(銀行, 貯蓄金庫, スペイン金融公庫)が MC を導入している。その背景として、スペインの金融機関は利益の 15~20%を社会活動の為に配分することが義務付けられているからであり、MC は社会活動の新たな分野として注目されている(坪井, 2009)。しかし、スペインの MC の現状として、(1)融資に至る件数は全体の 10%程度であり、(2)実際の融資対象となるのは返済能力が高いと見込まれる既存の事業主、および自己資金(30%~40%)を用意できる人、(3)そうした選別が行われているにも関わらず、返済率は 60%程度と MC としては極めて低いものとなっていることが挙げられており、総合的な支援の必要性が示唆されている(坪井, 2009)。つまり、MF による社会貢献を謳うスペインの金融機関においても「ターゲットングの問題」が起きており、最貧困層の排除が行われている。

### 2. 研究対象事例の概要

研究対象である“Proyecto Confianza”は、グラミン銀行型 MF による最貧困層の社会包摂を目的とした MF プロジェクトであり、その特徴は非金融支援に重点を置いている点にある。非金融支援の中核事業である「定例カウンセリングミーティング」(以下、ミーティング)は、最貧困層の組織化を行うことにより同様の社会・経済的背景を持つ人々が相互信頼関係を築くことを目的として隔週でグループごとに行われている。

### 3. 本研究の目的

本研究が調査対象とする MC プログラム「Proyecto Confianza」では、ミーティングへの参加が義務付けられ

ており、ミーティングへの参加はプロジェクトへの参加を意味する。しかし、先進国であるスペインにおいても、本プロジェクトの対象である人々は日常的に圧倒的な格差、差別、偏見にさらされていることから、ミーティングへの継続的な参加は容易なことではないと予想される。本プロジェクトでは、継続的なミーティングへの参加を行う参加者が存在することから、彼らがミーティングの継続参加に至った行動変化のプロセスとその意味を明らかにすることにより MF による最貧困層の包摂に必要な要因を見出すことを本研究の目的とした。

### 4. 調査の概要

スペイン、バルセロナ市において、調査期間中(2017年1月9~13日)に行われた15のミーティングに出席し、参与観察を行うと共に、プロジェクト運営側スタッフおよび各ミーティング参加者186名にインタビュー調査を実施した。

### 5. 分析手法

本研究では、ミーティングへの継続参加という現象を理解する為に、社会的相互作用に関わり、プロセス的特性をもつ現象に適し、また実践的活用を明確に意図した研究方法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析を行った。

### 6. 結果と考察

GTA による分析の結果、ミーティング参加者の行動変化のプロセスとその意味について①移民グループ、②路上生活者、シェルター居住者グループにそれぞれ特徴となる結果が明らかとなった。

## ①移民グループにおけるミーティングの継続参加に至る行動変化のプロセスとその意味

参加者の発言から、参加のきっかけは『家族、知人の紹介』、『プロジェクトへの興味、関心』、『孤独感』、『金融支援ニーズ(融資, Beca)』であり、それらを【きっかけカテゴリー】に分類した。続いて、参加者がミーティングへの参加を通してプロジェクトを評価するという意味の『様子見』から互いの悩みや考えを『共有する場所の獲得』を経て、参加者による『ミーティングピアの自然形成』が行われた後、ミーティングが参加者にとって『助け合い』の場として認識されるようになるという変化のプロセスがみられた為、これらの概念を【継続参加にいたる行動変化カテゴリー】に分類した。そして概念間の関係から、本グループの参加者は『助け合い』によってミーティングへの継続参加意欲が高まるというコア概念が導き出された。これらの行動は、『楽しい体験』、『多様性理解』、『居場所感』を分類した【継続参加促進カテゴリー】によって変化が促されることが分かった。

## ②路上生活者、シェルター居住者グループにおけるミーティングの継続参加に至る行動変化のプロセスとその意味

本グループでは、参加者の発言から参加のきっかけとして『金融支援ニーズ(融資, Beca)』『プロジェクトへの興味・関心』『家族・知人の紹介』『孤独感』に関する発言が挙げられた為、これらを【きっかけカテゴリー】に分類した。次に、『様子見』、『共有する場所の獲得』、『ミーティングピアの自然形成』に関する発言を【継続参加にいたる行動変化カテゴリー】に分類した。そして概念間の関係から、ミーティング参加以前はスティグマや自己差別の意識を持っていた参加者が、ミーティングにおいて自身がメンバーに果たす役割を通じてグループ、社会に貢献する自己を認識することにより、自身やグループメンバーを誇りに思う気持ちが生まれることを意味する『スティグマからの脱却』がミーティングの継続参加に繋がることが分かった。また、これらの行動は『居場所感』、『自己実現欲求の彷徨を分類した【継続参加促進カテゴリー】によって変化が促されることが分かった。

## 5. 結論

本プロジェクトが既存の MC プログラムと異なる点は、最貧困層のグループ化に加えて、(1)融資の承認はグループメンバーが決定権を持つ、(2)ミーティングの内容は参加者に委ねられている等、参加者が自身の選択に「決定

権」を持つことにある。例えば、融資を受けるか否かについても運営側から強制されるものではなく、参加者自身がミーティングを通じて見極めることになっている為、「今はまだ融資を受けるつもりはないが、ミーティングに参加にしている。」と発言する者もいた。こうしたインタビュー内容を分析した結果、本プロジェクトの参加者は、「最貧困層であるから当然金融支援を受けるべきである」という選択肢を限定されることなく、ミーティング参加の過程において自身がグループに対してどのような役割を果たすのかを認識し、参加の意味を自身が見出すことによってプログラムから脱落することなくミーティングへの継続的な参加に至ることが分かった。この結果より、MC プログラムによる最貧困層の包摂において、参加者の「自主性」を引き出せるか否かが重要であるということが本研究において明らかとなった点だといえる。

## 6. 今後の課題と示唆

プロジェクトの課題として、スペインの法制度および資金源が銀行であることから、(1)対象が限定された最貧困層であること、(2)運営側の深刻な人材不足、(3)融資額の引き上げが困難であること、が挙げられる。また、本研究の結果、参加者が他メンバーへの貢献やグループ内での助け合いに意味を見出していたことから、参加者が自身の行動によってグループに還元できたと実感できるような制度を新たに設けることがプログラムの持続可能性を高めることに繋がるのではないかと考える。例えば、融資を受けた参加者が期限通りに返済を完了した場合に、その利息をグループに還元出来る制度(他メンバーへの融資やエクスカージョンを充実させるなど、その目的についてもグループで話し合い決定すること)がよりプロジェクトの充実に繋がることを期待する。

## 主要参考文献

坪井ひろみ, 2009, 坪井ひろみ. “スペインのマイクロクレジットは“手段”か“目的”か.” 秋田大学工学資源学部研究報告 30: 9-14.

Asif, Dowla, and Barua Dipal, 2006, "The poor always pay back: The Grameen II story." Kumarian Press, Inc.

Goffman Erving, 1963 Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity, prentice-Hall, Inc. =19701130, 『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』, 訳者 石黒 毅, せりか書房